

呪いの世にて空を飛ぶ

権現

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ただ其処にいて、私の通る道にいたからぶつ飛ばした。理由なんてそれで充分よ」

平安の世、呪いの世、強き者が笑い、弱き者が泣き叫ぶ、屍山血河の廻る世に

紅と白の二色蝶、それ舞う空は、変わることなく

※※※

ジャンプ本誌最新話までの要素を多分に含んでいるため、ネタバレが嫌な人はブラウザバック推奨です。

目次

博麗の君	1
千年前の一時	10
ただいま千年前の日常	23
呪いと相反する者	35
縁は縁でも腐れ縁	46

博麗の君

■——博麗の社——■

「あゝ………これほどの位だっけ？」

古ぼけた神社の境内にて、山のように積み重なった黒い影群。

その上にて胡坐をかいて鎮座している少女が其処にはいた。その顔はうんざりしているようで、まるで疲労を感じさせない態度だ。

その姿に淀みはなく、穢れはなく、汚れもなければ埃もない。……血生臭い黒い影群は別として。

「ざつと五十、後から来るだろう五十も合わせると半数だろうね」

「はあ気怠けだるいわ……毎度毎度懲りないわよねえ」

「本当だねえ」

袈裟姿で額に傷のある男は少女に心底同意するように言葉を吐き出した。

男は心底嫌そうにしながら山となつている影群の一匹を軽く蹴飛ばす。唸る影はその一撃でぐしやりという音と共に潰れた。

少女はその潰れた瞬間に飛び出た赤黒い液が境内に散らばつたのを見て眉間に皺を寄せる。

「ちよつと、汚さないでくれる？何のために殺さないで置いたと思つてるのよ」

「ああ、ごめんごめん。後で洗うよ。ちよつと苛立つてしまつてね」

「はあくこれだから男どもは。私は自分の縄張りを汚されるのは嫌いなものよ。折角雑巾がけまでしたのに」

「ごめんつてば、というか宿儻すくなと一緒にしないでくれるかい？私だつて汚いよりは綺麗な方がいいんだよ」

「どうだか……まあ、それはいいとしてなんか用？けんじやく 綱索」

「いや、また藤原連中が攻めてきたつて聞いたから手伝いに……という建前は置いておいて暇潰しにだよ、博麗の君」

幾多の呪と人の屍を積み上げて、余りに濃く禍々しい残穢があたりに漂っているというのに、白く清浄に保たれている少女——博麗の君へ向けて、けんじやく 繩索と呼ばれた男は微笑んだ。

■——清浄の地——■

——博麗の巫女——

京の都より離れた辺境の地——そこにある神社で一人巫女をしているという噂が

そこかしこで流れたのはつい最近の事。

その地は呪い蔓延るこの日ノ本で唯一呪いがないとされる清浄の地とされていた。そして、そこへたどり着いた人は山の頂上に居を構える神社の主、まだ女と呼べぬ少女へこの地へ住む許しを乞うたのだそうだ。

少女はそれを気にした様子もなく、勝手に住みたければ住めばいいと気だるげに応え、人々がこの地へ住むことを許した。

だが、呪いなき地とはいえ、呪いとは人から生ずるもの。忽ち呪いなき地とされた場は移民の僅かな不満が溜まりに溜まった末、呪いが生まれた。

そして、その呪いは生み出した移民のみならず、山の頂に住む少女にまで手を伸ばさんとしたが、その少女を視界に入れた途端、姿形を保てなくなり消滅したそうなの。

やがてその地はまた少女一人が住む地となった。

そういった話が風に乗って京の都にまで届いたのだそうだ。

然らばそれほど力を持った女を呪いを祓うことを使命とした術師どもが放っておくはずもなく、すぐさま兵どもをその地へ派遣した。

だがしかし、呪いを持って呪いを祓う術師では少女の力の前では何の意味もなかった。

少女は京の都の兵どもが都へと馳せ参じるよう命じた途端、面倒臭げに「断る」と率

直に口にした。

是非もなしにと無理やりにも連れて行かんとした術師たち。思い思いにその力を開放せんとするも少女が発した力の前に敢え無く撃沈。

逃げ帰る兵どもに少女はこう告げたそう。

「馳（ご）つこを続ける馬鹿どもに力を貸す道理はない」

それから、京の都では名を名乗られずとも神社の鳥居にかけられた名から、少女を「博麗の巫女」と呼称するようになったそう。

■——博麗の社——■

「それにしても、長い付き合いだし……そろそろ名前を覚えてくれないんじゃない

かい?」

「いやよ、どうせ名乗ったらそれを種にまたぞろ悪巧みするつもりでしょ」

「いいじゃないか、どうせ君に縛りは効かないのだし。私だって君ともっと仲良くしたいんだよ」

「仲良くつたつて、ぶっちゃけ私としては宿儺よりましつてだけであんたも胡散臭いと思つてるんだけど」

「けどこうして話してくれる分には君との仲は浅くないと思つてるんだけど?」

「まあ、面白そうな話を聞かせてくれる分にはね。けどあんたの悪巧みには関わりたくはないわね」

「どうして? 君だつて面白いことには首を突つ込むじゃないか」

「私が部外者ならつてのを忘れないでよね、当事者になつたらどうせ私が後片付けに駆り出されるんだからやつてらんないわ」

和気藹々と、何もなくなつた縁側で話す博麗と**絹索**。

その間には**絹索**がお裾分けとして持つてきた団子があり、両者ともに頬張りながら話していた。

しばしの沈黙、やがて**絹索**は彼女へ話を切り出した。

「ところでさ、今また面白い試みをやってるんだ」

「お帰りはあちらで賽銭入れてっつてね」

「ちよつとちよつと、少しは話を聞いてくれよ、残りの団子はあげるからさ」

「前置きは良いわ、さつさと要点を話しなさい」

「相変わらず変わり身早いね……まあ、それは置いておいて」

—— 博麗の君、千年先の世に興味はないかい？ ——

■ —— 現代 —— ■

時に、博麗の巫女の力の正体とは何だろうか。

術師の呪術と呼ばれるものであるか。 —— 違うだろう。

呪術とは、呪いを持って呪いを祓う人の見出だした呪いへの対抗手段だ。

故に、呪いを祓ったとしてもそこに術師の呪いは残ってしまう。

だが、博麗の巫女の力は違った。

彼女が住んでいた地——清浄の地と呼ばれていた地は呪いなど痕跡のかけらもなかったのだから。

即ち——呪いならざる力を持つての除霊。

話は変わるが呪術には反転術式と呼ばれるものが存在する。

呪力と呪力を掛け合わせる事によってそれとはまったくの逆転した力である正の力が生まれ、呪いとは真逆の効果を発揮する術のことだ。

その力は呪いの塊である呪霊には滅法強く働き、即座に消滅させてしまう程の効力を発揮するのだ。

話は戻るが、博麗の巫女。

彼女の力の根源とは何か。千年前の平安から現代にいたるまで様々な形で伝承され、その力の根源を見出そうとしてきた術師たちは、その力は自分たちが使う反転術式こそが力ギなのではないかと思いついたのだ。

即ち、完全なる呪いからの脱却。反転の極み、陽の力。それこそが彼女の力の正体な

のではないかと。

日ノ本より離れ、弘原海を超えた先にある大陸の国ではこんな話がある。

陰陽太極

陰極まれば陽に転じ、陽極まれば陰に転ず

この言葉がもしも術師の呪力と関係するのなら、その力こそが真の意味で呪いを祓うことの出来るのではないかと。

術師たちはこの力のことを呪力とは異なる力、その力を振るう者が神に仕える巫女であることから、陰極まった末の反転した陽の力——巫力と名付けたそうだ。

「これだ………」

現代——呪術高専の深く深層とも呼べる蔵にて、金髪の長い髪を靡かせながら、女はニイっと口元を歪ませた。

千年前の一時

■——清浄の地——■

閃光——後に唸る轟音。

中心地より数百メートル離れた森林が、その音に続くように薙ぎ倒される。

それは綺麗に閃光が奔った場所を中心地として円を描くように吹き飛ばされていた。当然、その領域は更地となり、草一つ生えていない平面となっている。

そこに、二つの影があった。

片方はもう片方に比べて小柄で細い。

もう片方は小柄な影を覆ってしまう程の大きさだ。

「毎度のことだけど……敢えて言わせてもらおうわ……」

しゅつしゅつこいのよ!!莫迦宿儻すくなアアア——ツ!!!」

叫ぶは小柄な影——その美しい顔に血管を浮き上がらせながら怒鳴る少女は、白い光を放出して向いの巨影を呑み込んだとした。

「ケヒ、単なるじゃれあいではないか、もっと愉しめ博麗ツ!!!」

呑み込まんとする光から後方へ飛びのき、巨影はその独特な笑いを吐き出しながら愉し気に未だ迫りくる光へその腕を振りぬいた。

キンツ——という音とともに横一門字に切り開かれる青い光。

その中から現れる少女——博麗の君は激昂しながら到底その華奢な姿からは想像できないほどの速度で飛び掛かる。

対するは少女を覆うほどの巨軀に四つの目に四つの腕を持つ異形の人型——少女に宿儻と呼ばれた者は、その少女を迎え入れる様に腕を広げ、自身も飛び掛かった。

再度の衝突、拳同士がぶつかり合うとともに起きる黒と白の火花。

ぶつかつた衝撃に意も返さない少女と怪物は引いた拳を何度もぶつけ合う。

何度も、何度も、何度も——技術も駆け引きも何もない純粹な殴り合い。

四本腕の宿儺の方が有利かと思いきや、博麗の君に当たる拳は一つもなく、逆に博麗の君の拳を宿儺は迎え撃つしか出来なかつた。

有利なのは博麗の君の方だつた。しかし、その戦況とは裏腹に楽しそうなのは宿儺の方で、博麗の君は未だ激昂したままだ。

「捌くなッ！弾くなッ!!いいからその面一発殴らせなさいッ!!」

「はっはアーツ!!相変わらず此方の攻撃は届かず、其方の攻撃ばかりが通る!!全く意味不明だ!!」

常人には目で追うどころかその様を視界に入れることすら出来ず即死するだろう死闘も、彼等にとっては単なる喧嘩でしかない。それを証拠に、未だ彼等は会話をする余裕があるのだから。

万を超える拳の応酬は、博麗の君が飛び膝蹴りを宿儺の顔面にぶち当てるといふ反則で途切れてしまう。

それに堪らず仰け反ってしまう宿儺。一方博麗の君はくるりと一回転して着地すると、先ほどの怒りはどこへやら、宿儺に一発お見舞いしたのが余程ツボに入ったのか今度は此方がゲラゲラ笑っていた。

「アハハハツ!!ザマアみなさい!!一発お見舞いしてやったわ!!」

「ツ……おい、殴るのではなかったのか」

「ああ?殴るも蹴るも同じでしょうが、ようはぶちのめせればそれでいいのよ!」

元の体勢に戻るも、鼻から流れ出る血を拭う宿儺は彼女へ苦言を申し立てるが、それを知ったことかと博麗の君は突っぱねた。

流石に宿儺もこれは癪に障った。蹴られたことよりも、鼻血が出ていることよりも、博麗の君が己を笑っていることに。

「……流石に調子に乗りすぎだ、少し仕置きが必要なようだ」

「上等、こつちだつて毎度あんたが家の神社ぶつ壊すのに怒りが溜まってたところよ。半殺しでもまだ足りないわ」

互いに見合う両者の身体から赤黒く禍々しい気と青白くも神々しい気が迸る。

激情と共に溢れ出る力の本流は、同じ力を宿す並みの術師であれば発狂する間もなく

消滅させるほど。当然その程度で終わる筈などなく、宿儺は四つのうち二つの両手を閻魔天印の手印を結び、対する博麗の君は右手人差し指を下にする降魔印と、それを逆にした左手人差し指を上に向ける独自の印を結ぶ。

これなる構えの意味は、呪いを道具とする呪術師の最終段階であり、呪術戦の極致。己の理を世に布き世界を染める理外の技。

「—— 領域展開 ——」

あの後、宿儺と博麗の君の本気の喧嘩まで発展したが、結局決着はつかず疲れたと言つて両者は切り上げた。

領域展開まで持ち出したものの、双方ともに互いを殺す気など全くなかった。只ほんの少し、互いの笑う顔がむかついただけなのだ。

そんな自分勝手な二人は現在、修復途中の縁側で空を見上げてぼけーっと日向ぼっこに興じていた。

「ちよつと！博麗!!アンタの神社なんだからアンタが直しなさいよ!!」

「なんで？物作るのはあんたの方が得意でしょ、万」

「だからってなんで私が無償で直さなきゃいけないのよ!!?せめて手伝うとかしなさいよね!!」

「ええ、だってあんた宿儺側でしょ?今回も宿儺が壊したんだから直すのは当然でしょ。後、今は日向ぼっこで忙しいの、私」

「~~~~ツ!!!?」

万と呼ばれた女はこの生意気な小娘に罵倒を浴びせたくて、けれど過去に彼女と勝負し、〃負けた方が勝った方の言うことを聞く〃という縛りを結んでしまい、結果負けてしまった以上言うことを聞くしかなかった。

万からしてみればそれは一生の不覚と言っていい出来事だった。そして、今も尚その縛りは有効である。なにせ、期限を決めていなかったのだから。

故に今、彼女は絶望の淵に立っていた。なにせ、彼女が一方的に思いをはせている存在——宿儺の目の前でこんな無様をさらしているのだから。

「~~~~ツツツ!!!!(ちつくしよーツ!!!)」

「は〜い、がんばれがんばれ〜」

それが、1000年前の彼らの一日のひと時だった。

■——現在・とあるカフェ店——■

とあるカフェレストランにて、一人の袈裟姿の男と、三人の呪いが会合していた。

三人の内、一人は不愉快そうに顔を歪め、残り二人は表情には変化が見られないが、其の二人とも先の一体と変わらず不愉快であると言った雰囲気醸し出している。

袈裟姿の男はそれに対して困ったように笑うとこう告げた。

「そんなに怒らないでよ、確かに遅れたのは悪かったけどさ。こっちにも用事があったんだ」

「フンツ我々との会合を遅れるほどの用事だったというわけだな？それをこちらが聞いても納得できるであろう用事であると」

苛立たし気な呪霊に、袈裟姿の男は笑みを深くする。まるで聞けば必ず納得すると言いたげに。

「いや、多分聞かない方がいいよ？君達にとつては」

「ほう……そこまで言うならば聞かせてもらおうではないか。此方にとつての聞きたくないこととやらを」

そう言葉を強くしながら、呪霊は自身の頭からポンツと音を鳴らすとともに、熱気を放つ。もしもそれがつまらないことならば、焼き尽くすつもりで。

袈裟姿の男はますます笑みを深める。だって、そんな脅しが何の意味もなくなり、寧ろ聞かない方が良かったと冷や汗を流す姿が容易に想像できるから。

「呪いなき地、清浄の地と呼ばれるところに行ってきたんだよ」

『』

三人の呪霊が息を呑むのが、男にはわかった。

はい、これで無駄話はおしまい。後は今後の予定を計画するだけだ。聞かずとももう彼等の返答は分かるが、それでも敢えて男は三人に問い掛けた。

「その場所が本当にあつたと知つた君等はどうする？」

三人の呪霊達の返答は決まっていた。

「聴かせろ」

一人の呪霊——漏瑚は冷や汗を垂らしながらも、聞かねばならないと本能で理解した。故に緊迫した様子で問いただす。他、花御と陀良の二人も表情は変わらずとも同様に緊張していた。

無理もないだろう。何せ、千年前の呪いという存在を許さない地が、今も尚現存しているというのだから。自分たちにとっては凶報以外の何物でもない。

その地が残っているということは、“例の巫女”が今もいるということなのだから。そんな存在が、今も尚この世のどこかに存在しており、且つ未だに全盛期の力を有しているのだとすれば、彼等が恐れぬ理由はなかつた。彼等の目的——この世を呪いの

世とするのに、どうあがいても障害となりうるに相応しき存在が今もどこかにいると知ってしまったのだから。

「おい、その地があるということ……!!」

「ああ、大丈夫大丈夫……彼女に關しては此方から仕掛けない限り全くの無害だよ。呪霊だからといって無暗に祓つたりしない。これは信じていい」

「……………真であろうな」

「うん、なにせ私の友人だからね。それに彼女は呪術師じゃない。気にするだけ無駄だよ」

どこかホツとするような三人を見ながら、袈裟姿の額に傷のある男——体の名を夏油傑、真の名をけんじやく縞索はこれまでのどの笑みとも違う、口が裂けたようにニイと口元を釣り上げ、嘲った。これからの世界地獄が楽しくて仕方がないと。

「いへ来るのも久しぶりかな」

繩索けんじやくは日本の某所の森林の奥深くにある古びた社の前に立っていた。

そこは不思議なことに人が出入りした痕跡がないのに、社は古びているものの傷んでいる箇所はどこにもなかった。

繩索けんじやくはゆつくりと社のそばまで近ると、袖の下を漁り五円玉を取り出す。そしてすぐに賽銭箱へ投げ入れて二礼二拍手一礼をする。

すると社の背後——森林が広がるだけのはずの空間が裂け、真っ直ぐな石段と共に山が姿を現した。

石段は頂上まで続いており、何かがあることが伺える。

繩索けんじやくは一段一段丁寧に石段を上っていき、そして頂上へたどり着いた。

そこには石段の下にある社と瓜二つの、あちらよりも清浄な空気に満ちている神社があった。

そして、その手前——賽銭箱に寄りかかるように禪を組んで座っている少女が目に入った。

「待たせたね、博麗の君」

繻索けんじやくの言葉に反応したのか、少女は閉じていた目をゆつくりと開いた。

その瞳は変わらず、穢れもなく、淀みもなく、汚れもなければ埃もない、繻索けんじやくが一目ぼれしたままの綺麗な目をしていた。

「もう千年たったの？随分と速かったわね」

「そりゃ君は寝ていたからね、私としては君に会うのは千年ぶりだよ」

「あらそう、少し見ない間にまた面のいい人へ乗り換えたのね。私としては前の方が好みだったけど」

「ありやりや……こつちの方がいけると思うんだけどな…失敗したか」

久しぶりの会話を純粋に楽しみたい繻索けんじやくに対しても、彼女は変わらず興味なさげだ。そんなところにほんの少しの寂しさと、同時に胸に広がる懐かしさに繻索けんじやくは失笑してしまった。

「さあ、約束を果たしに来たよ」

「ええ、せいぜい楽しませてもらうわ」

彼の言葉に、ようやく博麗の君も笑みを見せた。

ただいま千年前の日常

■——清浄の地——■

「それで………今が丁度千年先の世で合ってる？」

博麗の君は未だ清浄の地を形成している結界内部にいるため、今が本当に千年先の世なのか判断がついていなかった。けんじやく 羅索が結界の門を潜つたのだからそうなのだろうとは思うものの、いまいち実感がわかないのだ。

なにせ、自身の意識と肉体を「境界」で切り離し、肉体は自身の「巫力」によつて実質的な不老状態にしていたのだから。その間、意識は自己の生得領域内に籠らせて眠りについていたため、時間的感覚が大分ずれてしまった。これでは実感の仕様もない。

「ああ、此処から出ればすぐにわかると思うよ」

縋索けんじやくは淡々と彼女の問いに答えた。

博麗の君はその返しに「そう……」と納得した。縋索こいつは何故か自分には嘘は言わないのだ。故に、その言葉に疑いはない。

博麗の君はうんと頷いた後、腰かけていた賽銭箱からひよいつと飛び降りた。

ふわつと袖が舞い上がるも、着地の際の足音は聞こえない。

そのまま縋索けんじやくの隣に来ると、彼を見上げる形でその手を差し出す。

「はい、手出して」

「ん？ああ……そういうことか」

一瞬何のことかと思うも、直ぐに察しがついたため博麗の君が差し出した手に自身の手を重ねる。

すると、博麗の君の袖から赤い糸が伸び、腕を伝って重なった縋索けんじやくの手を通り越し腕に結び付いた。

ぱっと重ねた手を放し、糸が繋がっているかどうかを確かめるべく腕を左右上下に回してみる。

「これでいいわよ」

「相変わらず……凄いい技術だよ、この『境界』の糸は」

「でもこれ、呪力で作っても出来ないからね。縛る性質になる呪力に対して、この境界の糸は結ぶ物。反転術式に用いる正の力の性質を熟知してないとそもそも形にならないわ」

「後、反転術式を使える奴にしか効果ないし」と付け足す博麗の君。

そんな神業をさも簡単と言いたげな彼女にけんじやく縋索は「あゝ、戻ってきたな」という感覚があった。

千年の月日を生きてきた自分もかなりの経験と修練を積んできたが、未だに彼女に届いたという気がしない。甘く見積もっても漸く影が見えたかなと思える程度だ。悔しきはあるが、それ以上に博麗の君はこうでないかという憧憬が現実に戻ってきたのだ。当然嬉しい。

思わず頬を緩めてしまったためか、彼女は気持ち悪いものを見る目で此方を見た。

「なによ胡散臭く笑って」

「ただいま千年前の日常」

「は？」

今日は良い日だと繙索けんじやくは空を見上げた。

■——現在・岩手県・盛岡市——■

「はああ〜……美味しいい」

盛岡駅付近の某〇屋にて、彼女は繙索あいつがおすすめした蕎麦に舌鼓。
それはそれは幸せそうな顔だった。

彼女の周辺に蠅頭一匹たりとも存在しないといえはその空気のほっこり具合が伝わるだろうか。

博麗の君は満喫していた。千年前の世では体験できなかつた娯楽溢れる現代をそれはもう楽しんでいた。

数時間前、結界の外へ出てすぐに博麗の君はけんじやく絹索に現代でまず彼女が興味を持つているのであろう場所に案内させた。

だからといって好き勝手な場所というわけではなく、あの面倒臭い呪術師が集まる京の都や、もう一つ集いの場として増えたという東京には遠ざかる形にした。

其処等は博麗の君も承知していた。今もあの鬱陶しいとご鼯ごっこを続ける馬鹿どもに自分から関わりたくはない。

よつて、都会でも田舎でもなく、割と半々な形で残る岩手の中心地にしたのだ。

食いしん坊な彼女にとつてうれいしことに、駅周辺には美味しいものが割と揃つているのである。そして都心よりも安いので懐にも優しい。

そんな理由でけんじやく絹索は博麗の君を連れ出した。

途中、個人的な用事があるとかで彼女一人になってしまっているが問題はない。

だって財布は彼女の元にあるのだから。その貯蓄の許す限り彼女は食べ歩くことに

した。

「満喫しているね」

「あらおかえり、もうちよつと遅くても良かったわよ」

ふと、彼女の腕に巻き付いている赤い糸が反応した。

結ばれたその先には同じく腕に赤い糸が巻き付いているけんじやく罫索けんじやくがある。

今更だが、この「境界の糸」の役割がこれだ。

——「境界の糸」——

博麗の君が編み出した結界術の到達点たる「境界」を更に応用した術。

まず、正の力の極みたる「巫力」で以て糸状の結界を形成。

同時に境界としての性質であるモノとモノの隙間を糸に付与。

後は正の結界式の性質たる「結ぶ」力で二者の間に繋がりを形成。

このすべての工程を行ったことよって、糸で結ばれた術者と片割れは互いの位置を糸を通して共有可能となる。また、糸を辿ることよって被術者も術者の元へ呪術的に遮断された空間でなければ辿り着くことが可能となるのだ。

当然、呪力ではない為に残穢は残らないので術者と被術者以外の者では痕跡を辿ることも出来ない。

これは、境界に至っている技量と呪力の反転たる正の力、呪術師で言えば反転術式を会得していなければ不可能。更に言うのならば、反転術式を会得している者同士でのみにしか適用が出来ないのも短所と言つていいだろう。

尤も、理の既外にいる博麗の君と千年を生きたけんじやく羅索には関係ない短所だ。

「彼方の要件が単純なものだったからね、話はすぐに終わったよ」

「あっそ、じゃあちよつと待つて。まだこのヒレカツ丼食べ終わってないから」

「いいよいいよ、ゆっくりしてってね」

「ふう……………」

煙管を吹かせる呪い——カフエレストランにいた時よりも随分と小さくなった火山の特級呪霊漏醐じょうじはぼうつとしていた。

傍らに居るのはレストランでは見かけなかった、漏醐に劣るもののもそれでも尚どす黒い呪いを振りまく人の特級呪霊真人まひと。

互いに蹴除されてはいないものの、無視できない程の消耗をしていたため次なる呪い合いに備え呪力の回復に努めていた。

「ねえ、漏醐」

「なんだ……………」

すいすいと活火山付近の温泉を泳ぐ真人はふと、気になることが頭に浮かび漏醐へと問う。

「博麗の巫女ってそんなにヤバいやつなわけ？」

「……………ヤバい、程度で済めばいいがな」

しかめっ面をしながらも煮えたぎらない返答を返す漏酬に真人は訝し気にしながらもある程度の納得を示す。

しかし、それでも聞いたことがあるだけで見たこともない博麗の巫女が、本当に自分たち呪いの天敵たりうるのか甚だ疑問だった。

「確か、宿儻と唯一引き分けたって聞いたけどさあ……ぶっちゃけ尾ひれついてそうだなあって俺は思うけどな」

宿儻の尋常ならざる在り方とその根幹を文字通り刻み込まれた真人にとって、あれと引き分けたというのがどうにも疑わしかった。

そもそもその博麗の巫女は人間だというのだから、それが千年もたつて未だに生きているというのが可笑しい。

よしんばその力が本物だったとしてもあの宿儻と引き分けられる存在というのは真人にはどうしても想像できなかつた。

「ひょっとして夏油のブラフだったたりして」

「……奴は胡散臭く、そして用心深い故その可能性もなくはないだろうな」
「だろう？ならさ」

——瞬間、周囲の残穢が根こそぎ消し飛ばされた

「!!!?」
「」

真人と漏醐は動けなかった。

まるで太陽が其処にあるような、これ以上ないほとまの絶対的存在感。

背中越しにも伝わる圧倒的な正の力の本流。

そのまま存在を保つことすら危うい力に、二人は抗う術を持たない。

どうしようもない彼我の力の差をたった一息で刻み込まれた。

「(これ……あの時と同じだ……ッ)」

真人は戦慄していた。

あの時、宿讎と魂越しに対峙したときに刻まれたどうしようもない無力感。

自分の命が脅かされている……いや、避けられない死を実感した瞬間に溢れ出る恐怖。

これにはどうしたって敵わないと示された明確な絶望。

「“これ等”があんたの言つてた協力関係の呪い？」

その声は自分たちを敵として扱っていなかった。

“これ等”と言つていた通り、自分たちをそこら辺の石ころと同じようにしか見ていなかった。

その扱いに対して不愉快に思うもすぐにその思考は掻き消された。

「まあ、そうだね。でもあんまり虐めないでくれよ」

「虐めてるつもりないけど……私はあんまし近寄らない方がよさそうね。気を抜いたら消しちやいそうだし」

その言葉と共に、自分たちを滅する力の波動は弱まった。

膝をつく真人。

止めていた呼吸を再開する漏齣。

彼等は今初めて、自分たちの“生”を実感した。

その直後、真人は其処にいるであろう存在を見るべく体を回した。

「

——そして、真人の両眼は潰れた。

呪いと相反する者

■——時間継続・◇◇某所——■

「——ッ!!?」

真人は悲鳴を上げる間もなく仰向けに倒れる。

両手は潰れてしまった眼を覆うべく光が差さないようがっしりと押さえた。それでも潰れた眼が見てしまったモノからの輝きは真人の両目を奪うだけで飽き足らず、このまま焼き尽くしてしまうのではないかという程の激痛を齎した。声なき悲鳴を絞り出そうとするもその労力は目の再生に割かれ、軋むような掠れた音が漏れ出るだけ。

その様を見た漏醐はすぐに真人と博麗の君を遮るように立つ。

一時も、瞬きすらせずに博麗の君を睨みつける漏瑚は、花御から渡されたコルク程の大きさの耳栓を融かし頭上と両耳からマグマを吹き出す。

それは咄嗟の事だった。今まで仲間意識を持つてはいたものの、花御や陀良程表立つて同胞を守ろうなどという馴れ合いはしてこなかった。どちらかと言えば真人と似た立ち位置でいた漏瑚にとって、今自分がしている行動は彼にとって必要のない、そして相対する博麗の君を前にしては無謀な行動に他ならない。

なのに、漏瑚は自身で困惑しながらも戦闘態勢を解こうとはしなかった。それを興味深そうに眺める夏油ヲモと心底面倒臭そうにしている博麗の君。

「何、あれもしかして私の術式がなんかしたわけ？」

「……あくそういうことか。君の言葉で納得したけどそういえば真人は他人の魂が見えるんだよ。だから君の魂に刻まれた術式でも見てしまったんじゃないかな」

「ええ……キツシヨ、私何にも悪くないじゃない」

溜息を吐きながら博麗の君は右手で印を組む。

それに警戒心を示す漏瑚。だが、体は動かない。

いくら博麗の君の力の波動が小さくなったとはいえ、彼女の周囲は未だ聖域——呪

いにとつての死地である。此方から仕掛けることはそのまま自滅につながる。

よつて、漏醐が今出来るのは相手の出方を覗うことのみ。

そして博麗の君がその印を解いた——が、術らしきものは発動された動きはない。

困惑する漏醐に、今まで会話相手としてみていなかった博麗の君の視線が此方を覗く。

「別に何もしたりしないわよ、ただちよつとそいつが私を直視出来ないよう認識をいじつただけ」

「……………信じられる要素がない。貴様は我々の天敵だと確信した。何があつたとしても相容れぬ」

「それはそう、でも私としてはあんた等は敵ですらない。その程度の連中に嘘なんてつかないわよ」

面倒臭そうに吐き捨てる博麗の君に、漏醐は言い返すことが出来ない。事実だから。

ただ相対した、それだけで格の違いを思い知らされた。そして博麗の君が嘘をついていないのは間違いないのだろう。だが、それでも戦闘態勢を解くことが出来ないのは彼女の言葉以上に彼女の存在に己が恐れているが故。彼女がこの場を去らない限り、漏醐

の身体が緊張から解かれることはない。

「大、丈、夫、……もう大丈夫だよ、漏醐」

「真人ッ!？」

両目の再生が終わったのか、真人はゆっくりと体を起こし漏醐の肩に手を置いて彼女と相對する。

今度こそ彼女のその姿を見つめる真人。真人にいつもの軽薄そうな笑みはなく、眩し
そうに目を細める程度ではあるもののしっかりと彼女を見ることが出来た。

「アイツの言ってることは本当だよ。ちよつと眩しいけど目が潰れる程じゃない」

「だがッ」

「な、くに?らしくないよ漏醐。夏油がアイツを連れてきたつてことと、アイツが俺に気
を使ってくれたこと、少し考えれば今はこっち側だつてのは分かるでしょ」

「……………」

真人の言葉に、漏醐は黙るしかない。確かに、冷静になつてみればこちらと他者間の

縛りによつて同盟関係にある夏油が此方を害することは無い。

こちら側の勝利の最低条件である五条悟の封印が達成されるまでこの縛りは有効だ。であるのならば、目下五条悟以上の脅威である博麗の巫女が夏油の知り合いである以上此方を害することはない。

そこまで考えが至つたことで、漏瑚はようやく体から力を抜くことが出来た。思わず安堵のため息、次いで来るのは何の連絡もなく博麗の巫女を連れてきた夏油へのいら立ちだ。

「おい夏油貴様、何故博麗の巫女を連れてきた!!」

「博麗の巫女つて? 私の事?」

「ああ、君が眠つてから大体100年くらいかな、その頃から博麗と書かれた神社の巫女——博麗の巫女つて言われるようになったよ」

「へえ、そのまんまね」

「安直だよねえ」

「聞けえい!!!」

漏酬は完全に不貞腐れていた。夏油の説明が不十分だったからではなく、自分達の天敵である博麗の巫女が一先ずはこちら側であると分かったことへの不満でもない。それについては寧ろ安堵した位だ。

では、なぜ不貞腐れているのかと言われれば——

「へえ、今の時代の人間ってそんな馬鹿みたいなこと考えてんのね」

「そうそう!!ほんと馬鹿らしくて笑えて来るんだよ。特にこの前の連中は傑作だったなあ……俺の言った事まんまと信じてやんの」

「あく似たような連中なら知ってるわ。私がいれば大丈夫だと勝手に思ってた勝手に不満漏らして勝手に自滅した連中。あんなざま見てたら宿儺とかそこら辺のがまだマシよ」

「呪いなき地」というのは、人間もいないということでしょう
か

《font:ul109》呪いなき地というのは、人間もいないということでしょうか
font》

「ん……私以外は定住しないし出来ないから、最終的に人間と言えるのは私だけになるわね………つていうか気持ち悪いしやべり方しないでよ」

「ぶう〜」

「此奴に關してはなんか懐いてきたし」

滅茶苦茶懐いてしまったからである

理由はもちろんある。

なんでも真人曰く「博麗の巫女は身体こそ人間だが在り方としては宿儺や自分達呪いに近い」というのだ。

何を馬鹿など笑えば、博麗の巫女は術式が魂に刻まれている關係上、基本となるのが呪霊と同じ魂だ。呪霊は術師とは違い肉体を持たず、術式は自己の魂に刻まれている。そして、博麗の巫女もまた生まれた瞬間から自己の魂に術式が刻まれているという特別な人間だった。

術師は自己の術式を概ね4〜5歳付近で自覚するが、それはどこに刻まれているかも同様に自覚するのだ。よって、博麗の巫女は術式の自覚と同時に自己の魂の輪郭を認識した。そこまでならば少し特殊な術師であったのだが、何某かが切っ掛けでその在り方

が反転。呪力の全てが巫力へと裏返り、肉体の劣化がなくなった。そしてそのまま年月を重ねたことで肉体と魂の境界線が歪み、言わば身体のある霊体へと変貌を遂げた。故に、呪力と相反する巫力を持つだけで、在り方としては真人らと近いというわけだ。

それを見つけたのは真人の眼力と、夏油綱の考察故。

よつて、此処にいる漏醐を除く三名は相反するだけで自分達と変わらない同胞だと認識したのだ。

「チツ……花御と似たような扱いをすればいい……か。簡単に言ってくれる」

漏醐が今口にしたのは真人からの助言だ。

花御もまた通常の呪霊たちとは異なる特殊な生まれ方をした故、純粋な呪いとはいいがたい存在だ。故にこの中で言えば最も呪いらしくない。だから、博麗の巫女もそれと似たような感じで認識すればいいというのだ。

実際この中で博麗の巫女に最も懐いてしまったのが花御なのだからそう認識できれば後は容易だろう。

だが、漏醐はそう簡単には割り切れない。

伝承として博麗の巫女を深く知ってしまったている漏瑚は一人であった時からその存在を恐れてきた。それが今更自分達と相反するだけであり方は同じであると目の前に突き付けられて、はいそうですかと受け入れられるほど柔軟ではなかった。と言つても納得もしているから、即座には無理というだけだ。時間を掛ければ慣れることも出来るだろう。

——それはそれとして、

「儂はまだ赦していないからな、夏油」

「ええ、引きずりすぎじゃない？ちゃんと説明して君も納得したじゃないか。ちよつと驚かそうとは思つたけど」

「ちよつとどころではないわ!!!」

ポンつと頭から輪つか状の湯気が飛び出す。分かりやすく怒っている。それに対して夏油はへらへらと笑うのみ。その様に更に怒りを込み上げ拳を握り締めるだけで手は出さない。それも縛りによる制限であつた。

「漏く漏くお前もこつちで話そうぜ」

「……………」

顔を引きつらせ、満面の笑みを浮かべる真人の方を向く漏醐。そこへ追い打ちをかける様にじーつと見つめる花御と陀良の曇りなき目。

興味なさげな博麗の巫女は此方へキョトンとした目を向けている。そこに先のような絶望的な威圧も、凍てつくような視線もない。その気になれば今すぐにも此方を殺せる力を持っているとは到底思えないだろう。だが、それでも――

「はあ……………博麗の巫女!!」

「ん、何?」

「本当に、貴様は此方を害しないのだな」

「しないわよ面倒臭い、だってアンタらも私に襲い掛かってきてないし」

「……………その言葉、忘れるなよ」

漏醐は漸く、その重い腰を上げて同胞の元へと歩き出した。

……………その姿を臉を細めながらニイツと口を三日月にして、縋索は笑った。

「うん、順調順調。やっぱり連れてきてよかった」

縁は縁でも腐れ縁

縁 れ 腐

そんな言葉が白髪おかつぱの少年とも少女ともつかない人物、裏梅の脳裏をよぎった。

その人物とは宿儺と幾度も小競り合いをし、その都度引き分け、終いは酒を酌み交わした唯一の例外。

宿儺に付き従う裏梅もその関係を悪くはないと思わせた腐れ縁。

されど彼女が言った「一度つながった縁はそう簡単には切れない」という言葉を今まさに実感していた。

「あ、裏梅じゃん。あんたも絹索アイツの誘いに乗ったんだ？」

「」

もう会えないと思っていた旧友に、博麗の君に会えたことに対する驚き。

次いで来たのはこのことを黙っていたあのにやけ面をした絹索馬鹿者に対する怒りであった。

■——陀良の生得領域——■

裏梅の到着により戦力が整ったと見なした絹索はパンつと両手を叩き自身に視線を

集めた。

「さて、それじゃ戦力もそろって交流も深めたことだし、作戦会議と行こうか」

「はい」

「はい、博麗の君」

「そういえばあんた等って何が目的で集まったの？」

そう、博麗の君が発言した瞬間——呪霊組の時間が止まった。漏瑚に関してはこの感覚は二度目である。

ギギギとさびび付いた歯車の様にゆっくりと首を博麗の君へと向ける漏瑚。その口元はハクハクと声が出ない様子。其処へ追い打ちをかける様に夏油は今気づいたと言いたげにハツとした表情で彼女へ説明した。

「あ、ごめんごめん。そういえば説明してなかったね」

「げエエとオオウウウ!!!」

ポポポンと頭上から黒煙を巻き上げる漏瑚に対して花御はどうどうと落ち着けんと

ゴミ一つない綺麗な海、生い茂る草木、さらさらと輝く砂浜で小さな火山が噴火した。

■——それから暫く——■

その後、鎮火した漏瑚はこの集まりから一人離れて頭を冷やすべく海に潜った。さながら海底火山のごとく。

それをしり目に夏油は博麗の君へと説明する。

1 —— 人間と呪霊の勢力図を書き換えること

2 —— そのために一番の障害となる術師・五条悟を封印すること

3 —— 両面宿儻を完全復活させること

大きな目標としてはこの三つを果たすべく彼等は此処に集まったのだ。それを聞いた博麗の君は特に反応することなく

「そ、説明ありがと。じゃあ、作戦会議続けていいわよ」

と、興味なさげだった。

意外に思う花御、陀良。しかし真人は博麗の君のその反応にニイっと口元を吊り上げた。

自分たちは人間を絶滅させようとしているにもかかわらず、それに対してうんともすんとも言わない博麗の巫女。

真人はそれが可笑しくて堪らなかった。この世で最も呪霊を絶滅させることが可能な人物が、それをせず寧ろ人類の絶滅を掲げる自分達に与しているという。これが笑わずにはいられない。

「五条悟の封印という最終目標の前に、高専側にある宿儻の指を回収するのが第一目標かな」

「高専って言うとか京の都にある方？それとも下^{くだ}った今の都のこと？」
「うん、京の都じゃない方だね。今の呪術界はそこに忌庫があるんだ」

博麗の君の問いに答える夏油。

嘗ての呪術界——博麗の君や宿儻が暴れていた時代の本元は今の東京ではなく京都であった。そこから年月を重ねた末、呪術の本元は東京と京都に二分した。それは特級の呪いに備え、大本が一か所に集中したことによってそこを潰されるリスクを想定したからだ。尤も、そのせいで東京と京都の交流戦などで対立が起こったりなどもしているのだが……………。

「でもさ、高専側に潜入するって言ってもその手段はあるの？確か天元っていう術師の結界で場所が分かんないって夏油が言ったんじゃない？」

真人は問う。天元の結界術によって高専に侵入することは通常の手段では不可能だと。

そこへ夏油は答えた。

「問題ないよ。天元の結界術は“守る”よりも“隠す”ことに重きを置いた結界だ。だから場所さえ特定出来れば侵入は容易になる。そして——」

言葉を途中で区切り、袖から一つの札を取り出した。

「高専側の指にはすでにマーキング済みだよ」

博麗の君はその札を見てほうつと感嘆の息を吐く。

「それ、“境界の糸”を模してるのね。呪符に結界術を予め仕込んでいおいて発動するって奴。出来るようになってたんだ？」

「流石にその場で作るってことは出来ないけどね。苦労したよ」

「“境界”とは？」

《font:ul109》境界とは《font》？「

「結界術の深奥、まあ結界術の極ノ番みたいなものだよ。それより、後は高専側に気付かれないように侵入する方法についてだ」

夏油は花御を指さした。今回の目標の要は君だと。

「花御は呪いの中でもかなり特殊だ。だから膨大な呪力も真人や漏瑚に比べて感知しにくい。加えて、高専の建物のほとんどが木材を使われている。つまり——」
「植物を介しての侵入は容易ってことか……」

真人の答えに夏油はにこりと笑って頷く。

「後は陽動役と、本命の忌庫に行く役の二組に分かれての行動がベストだね」

「では、陽動役は私が引き受けましょう」

《font:ul09》では、陽動役は私が引き受けましょう《font》

「んじゃ、忌庫役は俺がやろっかな」

「ねえ、私もなんかやることないわけ？」

夏油は面白そうと目を輝かせている博麗の君に相変わらずだと思っても、今回ばかりはダメだと首を振った。

「残念だろうけど今回はないよ、寧ろ今回は君が出たら勿体ないんだ」

「む、なんでよ」

「どうせ君のことだから件の五条悟にちよっかい掛けたいとか思ってたんだらうけど………流石に時期が悪い。ちゃんと時と場所は用意するから今回は許してくれ」

いずれちゃんと出番は用意すると博麗の君へと小指を差し出す夏油。それにムツとするも博麗の君は此方も小指を差し出しそれを結ぶ。

「指切」

■——それから暫く——■

作戦会議が終わり、各々が準備を整えようとしているところ、博麗の君は花御に声を掛けた。

「花御、ちよつといい?」

「　　なんでしよう、博麗の巫女

《font:ul09》なんでしよう、博麗の巫女《font》」

振り向く花御に博麗の君は徐に木の棒を投げ渡した。それを受け取る花御。

「これは?」

《font:ul09》これは《font》?」

「さつき彼奴が言つてたからそこら辺の樹の棒を使つたわ。あんた、自然のものだったら何でもいいのよね?だからそれに結界術を仕込んでおいたのよ」

「　　結界術、というと　先程　貴女が言っていた　“境界”　のことでしょ
うか?」

《font:ul09》結界術、というと先ほど貴女が言っていた境界のことでしょうか《font》？」

「まあね、なんかその五条悟つてやつのこと大分警戒してるっぽいからそれなりの物を仕込んでおこうと思つてね。それ使えばある程度の衝撃は肩代わりしてくれるわ」

博麗の君は自信満々に笑つて花御に説明する。

先ほど夏油が見せた宿儺の指へのマーキング術と同じく、予め結界術を仕込んでおくという技術だ。だが、夏油が呪符という呪術を介するのに適したものを媒介にしていたのとは違い、博麗の君は其処らへんの適当な木の棒、呪術的な媒介になりえない、けれどそれを扱う者に適した形のものに組み込んだのだ。

そんな高等な技術だとは知らない花御は、自分たちに近いとはいえ人間が呪いに何かを手渡すという行為がとても不可解に思えた。だが、どこか胸の奥が熱くなる感覚もあつた。

「術の発動条件は、その木の棒に呪力を籠めること。そうすれば後は術が発動してあんたを守る囲いが出来るわ。だからなるべくありつたけの呪力を籠めなさいね。出力の

面はその術が代行するけど、その燃料である呪力はあんた依存なんだから」

「……………」

「?どうしたのよ」

「いえ……………感謝します、博麗の巫女 私たちの同胞よ」

《font:ul109》いえ……………感謝します、博麗の巫女。 私たちの同胞よ》
font》

花御は心からの感謝を、博麗の君へと伝えた。それが伝わったのか彼女ははにかみながら笑顔の花御と返した。

「どういたしまして、よ」

そして、彼等呪いの躍動——その第一歩を踏み出した

——胸の内に呪いを抱えながら